

研究ノート

中華民国80年の社会

——『少年大頭春的生活週記』の台湾 社会事件編（その2）——

高橋明郎

1 はじめに

台湾のベストセラー作家張大春の『少年大頭春的生活週記』は、民国80年（1991）の台湾社会の動きを背景に話が進行する。この作品の理解には、この年の様々な事件の知識が欠かせない。

筆者は国家中央図書館所蔵の『聯合報』紙のマイクロフィルムをもとに、既に内政編（その1）⁽¹⁾、社会事件編（その1）⁽²⁾、人物編⁽³⁾を示し解説した。今回は再び社会事件の記事を扱う。

2 遠足バス火災事故

因為不久以前發生過一次火燒遊覽車的慘劇,所以現在我們旅行起來就變得很麻煩
80. 5.24 ~ 5.30 《緊張大白痴》一週大事 (P.155)

小説では、この事故の直後であるため、学校の遠足を見送りに来た保護者たちの過

-
- (1) 高橋明郎：中華民国80年の社会——『少年大頭春的生活週記』の台湾 内政編（その1） 香川大学経済論叢 73巻4号,2001年3月
(2) 高橋明郎：中華民国80年の社会——『少年大頭春的生活週記』の台湾 社会事件編（その1） 香川大学経済論叢 74巻4号,2002年3月
(3) 高橋明郎：中華民国80年の社会——『少年大頭春的生活週記』の台湾 人物編 香川大学経済論叢 75巻4号,2003年3月

剝反応が面白おかしく描かれているが、それほどに衝撃的な事件であった。

2.1 事故概要

民国80年(1991)5月15日、台北の健康幼稚園の児童・保護者・引率教諭を乗せ新竹市關西鎮の六福村野生動物園に向かっていた泰北交通公司(台北市)の観光バスが、途中桃園県平鎮市中興路を走行中に失火、児童20人、保護者2人、教諭1人の計23人が焼死し、他に火傷などの負傷児童8名を出した。この事故は、翌16日付の『聯合報』一面トップに置かれたほど社会の関心を呼んだものである。

今回の健康幼稚園(台北市仁愛路)遠足の教師・保護者・児童ら一行は計180名を超え、雙田交通公司(台北市)3台、泰北交通公司2台、計5台の観光バスに分乗し六福動物園に向かっていた。事故を起こした泰北交通の車両には児童42名、保護6名、引率教諭3名が乗っていたが、その後楊清友運転手(47)のガールフレンドも同乗していたことが分かり、結局53名が乗車していたことになる。

11時40分頃平鎮市中興路で運転席下から出火、瞬く間に燃え広がり、後部席の23名が焼死した。死亡したのは劉碧涵(6歳)ら年長組(「大班」)女児4名、男児5名、賴勃宇(5歳)ら年中組(「中班」)男女各5名ずつ、それに、年小組の男児侯乃維(4歳)、年中組でいずれも罹災死亡した女児廖若華の母李瑞蘭(37歳)、同じく女児林小雁の祖母褚玉恵(59歳)、及び引率の林靖妍教諭(32歳)である。

また侯秉奇(7歳)ら8人の負傷した児童は楊梅鎮の天成医院救急に運ばれたが、うち症状の重い4名は林口の長庚医院救急に搬送され、残り4名は天成医院で治療の後帰宅した。

当日夜、桃園地検の検事4名が葬儀場で検死と身元確認を行った。女児葉瓊菱の両親は門歯の欠けた状態から娘を確認した。賴勃宇の父は歯科医で、子供の歯も自分で治療していたので、すぐに自分の子を確認できた。

『聯合報』の余学俊記者は目撃者の証言を元に、事故の経過をほぼ次のように描いている。

午前11時40分健康幼稚園の児童は車上で楽しく過ごしていた。突然楊清友運転手

が「火事だ」と叫び、車内は火花がとび、黒煙につつまれた。同じ車両の張惠萍教諭は、家族に、5列目より後ろの子供たちは逃げ出せなかった、子供たちの退路が火によって塞がれていたと説明している。王淑玲は子供の王子龍と運転席後ろ1列目に座っていたが、前に座っていたので、幸いにも逃げられた、と言い、更に乗車した時から運転手が不真面目に感じられたこと、絶えず煙草を吸い、精神状態も良くなかった、引率教諭に注意してもらったが、様子は改まらなかったと述べている。

火が出て運転手が逃げるよう指示すると車内は大混乱になった。子供たちが泣き叫び、火が急に広まったので、王淑玲は自分の子と近くの子を抱いて急いで下車した。降りるやいなや、バスは火に包まれた。張惠萍教諭は2列目の児童の世話をしていたが、運転席で火が出るのを見て、必死で子供たちを抱いて下車したが、彼女も5列目までの子供しか救えず、車内は火の海となった。

子の張大得と運転席右の最前部に座っていた畢媛は、火が運転席で出て、運転手が出車するよう叫ぶと子を抱えて下車したが、何度か爆発音がしたという。なぜ爆発したかは分からないが、運転手が煙草を吸っていたのは見たと語った。林徳昇4歳は、「3列目にいたが、自分で逃げた」と言った。

当日の取り調べで、楊運転手は、座席下から出火したと供述、液化ガス缶についてはどうしてそんなものが有ったのか知らないとし、喫煙も否認した。しかし辛くも火を逃れた張惠萍教諭は目撃者として聴取された際、出火前運転手の喫煙で車内の空気が汚れていたこと、運転手に喫煙をやめるよう頼んだが、運転手は取り合わなかったことを供述した。

健康幼稚園園長の夫である呉文道氏は1号車で遠足に同行していた。11時半残り3台と動物園に到着した時、動物園職員から3号車が着いていないのを聞かされ、20分待ったが、なお到着しないので台北の幼稚園に電話して初めて3号車の罹災を知った。遠足は即時中止され、バス4台は直ちに台北に引き返した。

5台のうち中間の3号車が全焼する事故だったにもかかわらず、残りの車両が何事もなく目的地まで運行されていたのも不思議なことだが、現場の混乱はかなりのもので、燃えているバスを目にして通行中の車の運転者たちも、自ら救出に加わったが、

一方素知らぬ顔で立ち去った車もあった。救出の様子は次のように伝えられている。

バスが出火して路上に立往生したとき、後続のバンを運転していた鄒年廷氏(31)、彭華君氏(33)、邱春模氏らは沿道の市民と協力して児童の救出に当たった。彼らは道路脇から石などを持ってきて、バスの窓を割り、子供たちを抱え出した。バスの車高が高いため鄒年廷氏と彭華君氏は車をバスの脇に着け、その屋根に上がって次々8人以上の子供たちを脱出させた。ライトバンを運転していた邱春模氏は、数人を救出し、児童8名と教師1名を自分の車に乗せ楊梅天成病院の救急に運んだ。しかし、火が回ってバスに近づけなくなり、それ以上の救出はできず、残りの子供たちが火に包まれるのを見ているしかなかった。

この事故のように爆発的に火が広がるケースでは、消防が有効な時期に到着するのは無理な話ではあるが、それにしても当日現場に来るのには手間どったらしい。事故を目撃した陳盛勳桃園県議は、消防隊の到着が発生から30分以上たってからだったと指摘した。これに対し、中壠の消防分隊長は、到着は通報後24分であり、距離と道路状況からすると遅くはないとしている。

2.2 原因調査

原因は、侯寛仁桃園地検検事指揮下の現場検証で、運転席下のテレビ用変圧器にショートした跡が発見され、その脇に液化ガス7缶があり、ショートした火が液化ガス缶に燃え移ったため、急速に延焼したものとされる。一方、生存者は運転席下から出火したことと、出火前運転手が喫煙していたことから、落ちた煙草から引火したかもしれないと証言しているが、検事の質問に、運転手は喫煙を否認した。検察は楊運転手の身柄を業務上過失致死の疑いで拘束し取り調べた。また運転手の尿を採取し薬物使用がないかも調査した。

当日の6時間に渡る桃園県警消防隊鑑識による現場検証では、火路と車内の炭化状況から、発火点が運転席真下であることを確認、液体ガス缶の破片を採取し、また座席下の変圧器で4カ所のショート跡を発見している。このため鑑識では、失火原因は配線のショートで、それがガス缶に引火した可能性が高いとしている。証拠品は、計器分析のため中央警官学校消防系に送られた。

桃園県警消防隊の廖明川隊長は、原因としてこのショート、もう一つは運転手の煙草を可能性として挙げている。助かった児童や教諭らが運転手の喫煙を目撃しているためである。ただこの日の検証で出火点付近に煙草は見つかっていない。ただ、これほどの爆発的な延焼下では、運転手の煙草が原因であったとしても、煙草が残っている可能性は少ないとも言っている。また、ショート跡の有る電線がショートし高温になり、液化ガスに引火した場合、火は爆発的に広がるため後方の児童たちは前方に逃げることは不可能だったろうとしている。電線のショートが1次的なものか2次的なものか計器分析し、これが失火前に起こったものかどうかを鑑定することになった。

結局事故原因として、報道は

- (1) 変圧器が出火した際、生憎座席下に液化ガス7缶が放置されていて、おそらく漏れたガスに引火、一気に火勢が広がり逃げ道を塞いだ。
- (2) 後ろ側の非常口が固定され開かない場合、前のドアしか逃げ道が無かった。
- (3) 後方左にあった唯一の非常口は椅子の把手で固定されていて開けようがなかった。
- (4) バスはエアコン対応のために密閉式になっており、安全ガラスはなかなか割れない。加えて車両上にはハンマー等の緊急脱出のための道具が積まれていなかったため、乗客はどうしようもなかった。
- (5) 乗客のほとんどが4, 5歳の児童で、外から窓ガラスを割ったが車体が高く児童では逃げ出せなかった上、その高いところから窓を破って飛び降りる勇気もなく、生きながら焼かれることになった。
- (6) 運転手は車に消火器が一つあったが使いようがなかったと述べているが、検証で消火器は見つかっていない。

とまとめている。

2.3 波 紋

無論 20 名の園児の焼死は衝撃的であったが、世論をより憤激させたのは、引率教諭の殉職と、バスの設備不良が報じられた為であった。

目撃者の話では、引率責任者林靖妍教諭は、出火時直ちに前方のドアをあげ、出火の混乱の中、車両中程通路側に取り残された児童6名を次々救出した。バスはこの時かなり火勢を増していたが、車後部に取り残された子供たちの叫びを聞いた林教諭は、既に火の海となった車内に戻り、両手に4名の児童を抱えて脱出しようとしたものの、火に退路を塞がれた。火が収まってから、車内通路上に焼け焦げてうつ伏せに倒れている林教諭が発見されたが、その腕の中に4名の児童の焼死体が発見された。林教諭は健康幼稚園で既に長く勤めていたベテランであった。

また現場検証で、バスの非常口が座席のひじ掛けに固定されて開かなくされていたこと、消火器を積んでいなかったことが明らかになった。小説での、保護者が運転手に、消火器を見せるよう要求し、保護者や生徒の前で緊張した運転手が、操作の真似だけしようとして本当に消火器を発射してしまう辺りの記述は、まさにこの事の下敷きにしたものである。

この車両は車検に合格しており、車検の検査官が消火器や非常口の不備を見逃したか、車検後会社が勝手に改造してしまったかのいずれかで、バス会社の責任も追求することになると侯検事は表明した。

2.4 行政側の反応

『聯合報』の伝える郝柏村首相の「どうしてこんなことが起こるのか（「誰没有小孩，為什麼會發生這種事呢！」）」という言葉は、皮肉にもこの事故に先立って起こった中和自強ボーリング場での事故にからみ、原因究明と対策強化を政府で検討している時にこの知らせが飛び込んだ衝撃を示している。政府の胡志強新聞局長も国民に、より安全な社会のための協力を呼びかけた。

簡又新交通部長（国交相に相当）は、事故原因の調査を指示するとともに事故にあった児童と家族を慰問した。またバス業者に車両の安全性に注意するよう指示し、更に教育部（文科省に相当）と協調して、幼稚園児も学生安全保険（「学生平安保険」）の

(4) 「…集合時至少二十位家長圍着遊覽車司機問他車上有沒有滅火設備，司機說有，他們還不放心，一定要司機操作給大家看，那司機衰衰的，只好拿起滅火槍比一比，可是他被這麼多人包圍起來實在有點緊張，不小心就把一大堆像粉筆一樣的東西噴了一車。」（『少年大頭春的生活週記』155頁）

範囲に含めるよう検討することを表明した。

同時に、車検を通過していたとされるこの車両について、関係部門に次の点を精査するよう指示した。即ち、非常口が故障していたかどうか、保険に加入しているか否か、消防設備は万全だったか、ガス瓶は何故積まれていたかの4点である。

同部長は更に、バスのテレビ変圧器が失火原因とされていることに触れ、現在世界各国の観光バスでは、テレビや冷蔵庫の設置は普通のことであるが、業者がこれらを設置する場合安全性（配線方向や電圧の負荷など）に充分留意すること、また、業者も規定通り保険に加入し乗客や業者自身の保障に備えること、警察も出火原因の捜査を尽くすよう強く望むとした。

また、多くの学校や団体が国内旅行を企画する場合、経費節減のため旅行社を通さず直接運輸業者と契約するが、そうした際、大抵旅行保険が無視されてしまうこと、今回のような事故の場合旅行社を通していけば、最低でも100万元以上の事故保険が出る点に注意を喚起した。

黄徳治路政局長は、この泰北交通の観光バスが約2ヵ月前の3月18日車検を通過し、特に違法な点が無かったことを指摘する一方、車に搭載する冷蔵庫やテレビは車検の対象ではないこと、バスにテレビを設置することは電気・動力上の重大な改造とは見なされず、特に届出も登記も不要であると述べている。

もともと消基会は各種機関や学校が所謂自強活動や校外活動を計画する際は、事前に綿密な計画を立て、白バス（「白牌車」）を使わずに、免許を持つ旅行社を通じて免許業者の車両を利用し、出発前に必ず旅行保険に加入すること、校外活動は教育関係の部署に届け出ることを呼びかけている。

事故後は前述の簡又新交通部長のほか、黄大洲台北市長、連戦台湾省主席が、当日相次いで中壢市に遺族の弔問のため向かった。

黄大洲台北市長は、李登輝総統と郝柏村行政院長（首相）がこの事件には非常な関心を寄せ、彼に状況を調べるよう電話で指示したことを明らかにした。黄市長は一報を受けると林昭賢教育局長を長庚病院へ急行させ、治療中の龔銘隆、李両環、林廷翰、陳禹豪ら4名の児童を見舞い、中壢の葬儀場に向かった。自身も事故現場に入り、林局長と事故現場で原因の説明を受けたあと、夕方5時長庚病院で4人を見舞い、10

万円の見舞金を贈り、家族に安心して治療に専念するよう言った。そして8時には再び中壠に取って返して、葬儀場での葬儀に参加、遺族を弔問した。その後直ちに台北市立第2殯儀館に23名の遺体を安置する場所の確保を命じた。これは、中壠の葬儀場が一度に23人もの遺体を処置収容できないと判断したためであった。

台北市議会では、教育審査会議員がこの日社教館、美術館などの付属施設の予算を審議していたが、午後3時すぎ江興平議員が事故の知らせを受け、緊急発言し、審議に参加していた蔡榮桐教育局副局長に事故の経過報告を要求した。また議場では、皆起立して1分間黙禱した。審査会では翌日健康幼稚園に調査に行くこととなった。

馮定亜市議は教育局に、しばらく校外学習を中止するか、校外学習時の安全設備の点検と児童生徒の救命救急の講習を行い、悲劇の再発を防ぐべきだと申し入れた。

2.5 車両と補償

もともと健康幼稚園では前の週の月曜に遠足を予定し、雙田遊覧車会社にバス4台を予約したが、大雨のため中止、この日に遠足の振替をし、再び雙田に1台増しの5台を借りようとした。が、この日は車両に空きがなく、こうした場合の慣行として雙田は同業者の中信遊覧車会社から3台、泰北交通から2台を借り、このうち後者の1台が事故を起こしたものである。

泰北は古くから有る観光バス事業者で、民国58年(1969)に設立、7台の車両を保有しているが、これまで重大事故を起こしたことはなく、また白バス運行などの違法歴もない、どちらかという信用のおける会社であった。

新生北路の泰北交通会社では連木生社長の姪に当たる連麗雲業務代表が、事故車の車齢は6年で事故歴は無いこと、雙田に5,000円で貸し出したこと、50席を備え、民国75年(1986)国際自動車会社から購入した85年製の日本車で、定期点検も受けていることを取材や警察の聴取に対し答えている。

泰北交通は、事故発生後から問い合わせに追われ、連木生社長の子の連添富が、会社としては事故鑑定報告を待ち責任を取る予定であること、当日翌日の営業は自粛し、他の車両を徹底検査すること、賠償については同業公会に全権を委託して処理することを表明した。また、同氏は3月に車検に合格、2日前にも定期検査を終えたば

かりであること、楊運転手は昨年採用、重大な違反歴も無かったことを明らかにした。

泰北交通は、台北市遊覧車客運商業同業公会会員のための福利互助会という一種の連合保険に加入しており、被災者に最高 80 万元の賠償金が支払われる。互助会は事故の一報が入ると現地に入り善後策を協議した。

事故車の場合運転手も含め 51 名の保証金額は 4,080 万元、死亡、もしくは障害が残った場合の保証は 1 名あたり最高 80 万元、火傷怪我の治療に 1 名あたり最高 60 万元が支払われる可能性がある。

車検は 3 月 18 日台北市監理処北区監理分処で受け、車両状況は良好だった。問題の非常口や消火器については、規定通りだったと監理処はしている。

梁政文監理処長は、車検時は非常口も問題なく、消火器も使用期限内だったと述べると同時に、多くの観光バス業者が、車検後座席を増やすために非常口を塞いでいると指摘し、この非常口が封鎖されていたか、無理に開けようとして開かなくなってしまったのかは今後の調査を待ちたい、もし業者が非常口を封鎖していた場合は 1,800 元から 3,600 元の罰金が課せられると述べている。

また車検の重点はエンジン番号、ライト、非常口、消火器で、2 階建てやハイデッカー車の場合は非常口を実際に開けて写真に取り保存することになっている。ただ事故車は車高が 3.2 m と通常範囲であり、非常口に関する証明写真は残っていない。

一方引率の責任をもつと同時に被害者でもある健康幼稚園では、楊聰慧園長が、保険会社及びバス会社と善後策を協議し、遺族に伝えると述べた。また彼女は健康幼稚園は設立後 8 年目で、児童の安全にも関心を払い、通常 10 万元の安全保険をかけており、また今回の遠足に際しても不測の事態に備えて一人 20 万元の事故保険をかけている、被災した児童や遺族のため最高の補償を要求していくつもりであると表明した。

健康幼稚園は 8 年前園長の夫である呉文道が開いたもので、200 名の児童が通っている。毎年春の遠足に出かけ、今年は 180 名以上が参加していた。楊聰慧園長は事故発生後すぐ平鎮駐在所に駆けつけ、毎年春の遠足を実施しているが、このようなことになるとは予想もできなかつた、保護者にどう説明したものかと悲嘆にくれていた。当日の参加者名簿は引率責任者の趙主任の手にあったため、慌てて連絡を取り、22

名の死傷者が出たのを確認し、4時にはそれが23名となった。

2.6 台湾の交通保安体制

まず槍玉に上がる車検について指摘されたのは、当時車検記録が、数十項目を一括して記載してしまう所謂「大揮一筆」方式でなされ、事故車のそれもそうであったことである。この体制に対し、項目ごとに記入するものより、検査が形式的になりやすいのではという指摘がなされた。しかし監理処の職員は、検査項目が数十と煩瑣すぎて、一々記入していれば早くとも1台に5分、(それまでの通常のやり方なら1~2分)、詳しく見れば15分以上かかり、そうなれば一般のドライバーの苦情が来るし、毎日押し寄せる膨大な車両に対応し切れないと反論している。

監理処では、監督官庁の交通部に対し、部分的な項目は目視では検査しようがなく、検査が形骸化しているので部分項目の廃止を提言していたというが、この時点まで具体的な対応はされていなかった。

この件は悲劇的な大事故であったが、皮肉なことに当時の台湾にあっては、比較的条件の整った関係者の間で発生したものである。

これまで見てきたように、まず幼稚園側は法定の保険に加入すると共に、この遠足の為にも任意保険を掛けていた。私立の学校組織として、補償に十分に備えていたのである。交通部長の指摘するように、こうした保険を節約する学校も多かったことを考えれば、良心的な幼稚園であったと言える。

一方事故を起こした会社も、「白牌車(白バス)」ではなく、免許業者であった。そして座席増置による定員水増しの違法はあったものの、免許業者としてきちんと補償機構に加盟していた。

これは、事故の遺族や負傷者にとっては、不幸中の幸いであった。

一方、例えば車検後の車両改造が、監理処長すらよくあることと述べるほどであったのに、特段の取り締まりが為されていなかったり、白バスが堂々と免許業者と渡り合っていたりと、当時の台湾のこの面での規制の緩さは明らかである。

特に長距離路線では、事業を独占していてほぼ国営といってよかった台湾汽車公司

（「台汽」）の國光号に対抗して、各無免許業者が競って豪華設備の車両を投入、料金競争、スピード競争を繰り広げていたものである。堂々社名を車体に大書して高速道路を何往復も飛ばしていて検挙されないのも外国人には不思議であったが、またそうした会社を利用して事故に巻き込まれれば補償は十分でないだろうというのも外国人の認識していたところである。

結局、こうした民間業者の攻勢に、殿様商売の台汽は乗客を減らし、国の自由化政策以前に、已に違法業者による実質自由化がされていたも同然であった。やがて公式に民間業者の長距離路線参入が許されるようになると、ついに台汽は経営が立ち行かなくなり解体、従業員を大幅に整理し、路線も正式に県営交通や他社に譲渡した上で、現在では主要路線のみ「國光客運」の名前で営業している。

一方車両の競争は事故当時からはやりだしている 2 階建て、サービスの車掌乗務、マッサージ機能付き座席、各席に液晶テレビ設置、そして通路をはさんで各一席ずつの「総統座席」とエスカレートしていったが、安全面ではこの事故の時期より大きく前進したと言えない。

最近 2003 年 7 月 21 日にも、尊龍客運自慢の 2 階建てデラックス観光バスが、北部第 2 高速で事故のため停車中の車両に突っ込み火災が発生、6 名が焼死、4 名が負傷する事故が起こったばかりである。民間高速バスは豪華車内設備競争のせいで、車内に設置される座席数はダブルデッカーでも 20 席程度のものが多く、その意味で 10 人の死傷者というのは相当の事故であると言える。

この事故の場合も、運転手が真っ先に逃げ出して誘導が不十分だった他に、非常口のドアが、これまた改造した板と不法に増設された座席のせいで開かないようになっており、加えて 2 階部分の非常用の窓の操作方法が英語でしか書かれていなかったため惨事となったわけで、結局運転手の他、乗客の安全軽視で尊龍客運の徐明正社長も起訴された。以後の当局の検査で、同じ高級高速バス会社アロハ（阿羅哈）客運が非常口の前や 2 階部分に届出以上の座席を設置しているのが見つかるなど、バス業者のモラルの面で相変わらずの状態であるのが分かる。

またそれに対する行政も、尊龍客運事故前の 2003 年の 1 月から 6 月までの半年で、台北で摘発されたバス車両の安全設備違反が僅か(?)39 件だったのに、事故後は、7

月から9月の3ヶ月だけで179件になって、6月までの検査の甘さが台北市議会で追求されるなど、検査体制の整備も未だしというのが現状である。

3 葉啓田脅迫事件

紅歌星葉啓田遭歹徒勒索案偵破，刑警局幹員逮捕嫌犯林順賢，並當場起出勒索款新台幣二百萬元。

81.5.31~81.6.6《不當上帝，不當班長》重要新聞（P.159）

台湾の有名歌手葉啓田（本名葉憲修）は、民国80年5月26日、300萬元を要求する脅迫電話を受けていたが、刑事警察局特一隊は、31日金を受け取りに来た台中市のパン屋主人林順賢（33）を現行犯逮捕した。林は、暮らしが苦しく家賃が値上げされて今の商売が続けられなくなるのを恐れ、葉啓田を恐喝することを思い立たと供述した。林は巷間伝えられる葉啓田の別の五千万元恐喝事件との関連は否定した。葉啓田も五千万元恐喝の事実はないとしている。更に葉啓田は立法委員選挙に出馬する意思に変わりがないことも強調した。

3.1 前 兆

世間にとって、この事件の匂いは新聞の芸能欄から漂い始めた。

民国80年（1991）5月31日付『聯合報』芸能面は「葉啓田，今度は本当（『葉啓田，這次是真的』）」という見出しで、次のように報じた。

葉啓田は2日前に刑事警察局特一隊偵二組に通報，警察は脅迫電話のテープを入手，葉啓田周辺の人物を洗っている。警察では，半月前彼が台北市新店のある山で静養しているときに，彼の会社に五千万元恐喝の電話があったが，当時は気に留めず，警察に通報もしなかったが，しかしやがてマスコミにリークされた。

ほぼ10日して会社に戻ると，逃亡中の指名手配犯と名乗る男から会社に何度も電話があり，2~300萬元持ってきて欲しいとほのめかし，また警察には通報するなど脅し，そんなことをすれば為にならないと言った。葉啓田が数日取り合わないと，男は段々口ぶりが凶悪になり，金さえ持ってくれば勘弁してやると言う。葉啓田は密か

に電話を録音し、29日午前刑事警察局特一隊偵二組に通報し、捜査を求めた。

葉啓田は有名人であり、加えて年末の立法委員選挙への立候補が取り沙汰されていたため、警察ではこの脅迫事件を特別事件とし、捜査に全力を上げた。これは悪戯電話の可能性もあったが、警察としては周辺の洗いだしから真相に迫ろうとした。

数日間葉啓田は直接電話には出ず、社員に應對させ、録音テープを警察に提出した。葉啓田の友人は、葉啓田が、警察と罫を仕掛けて犯人を捕まえるようなことをしては、自分のイメージも悪くなり、また報復を受けるのではと心配し、同時に犯人が自分からあきらめるように願っていた、と語っている。この友人は、葉啓田がこの数日非常に神経質になり、家までつけられるのではと恐れて、自宅にも戻らなかったと明かしている。

葉啓田は記者会見を開いて、自分は大して金も持っていないし、自分を恐喝したところで無駄だと語っていた。

3.2 経 過

警察の発表では、林は台中からの脅迫電話の中で、香港のスター葉子楣と映画プロデューサー呉教の恐喝も自分のしたことだと匂わせたが、逮捕後、それは口からでまかせだったと述べている。

林は台中でパン屋を営んでいたが商売がうまくゆかず借金があった。テレビで、葉啓田が肝臓の薬のコマーシャルをしているのを見、葉啓田は大金持ちだと考え脅迫を思い立った。

この犯人が言っている漢方のコマーシャルとは、次のことである。葉啓田は肝臓を病んだことがあるが、その後も活躍しているのに目をつけたメーカーが、その会社の肝臓薬を「啓田肝保丸」として売り出した。これはかなり売れたようだが、葉啓田が弁明しているように、彼は広告モデルに使われただけで、一定の謝金しか受け取れない。

5月26日頃林は葉啓田の電話番号を調べると直ちに葉啓田の会社に電話し、自分は中部のヤクザの親玉（「老大」）であり、台中の「聯美歌廳」放火事件で逃亡中である。300万元を準備しろ、従わなければ香港のヤクザと手を組んで葉啓田の会社に火

をつけるか、葉啓田を銃撃する、また葉に不利なことをして年末の立法委員選挙に出馬できなくしてやる、と脅した⁽⁵⁾。

葉啓田は社員から300万元の脅迫電話があったと知らされると、知人を通じて刑事警察局に通報した。警察では先日、葉啓田が5,000万元を脅迫されたという噂があったこともあり、ただちに刑事警察局特一探偵二組に捜査本部を設置して対応していた。

林は葉啓田に6回電話し、葉啓田は悪い考えは捨てるよう、もし生活が苦しいなら幾らかの援助もすると申し出たが、犯人が聞かなかった。その交渉で金額は200万元まで下落、葉の会社の社員が現金が十分に無いことを理由に、20万は現金、180万は小切手とすることに合意、5月30日の夜台北市光復南路の「麗啣珈琲店」で受け渡しをすることにした。かくして林は台中から車を運転して受け渡し場所に来、自分の身分証明書を示して本人が受け取りに来たことを葉側に確認させた。警察は現場に張り込んでおり、状況を見て直ちに林を逮捕した。

逮捕後、林容疑者は、商売が上手くゆかず、ゲーム機にもつぎ込み、家賃も払えず、おまけに子供も機械で指を切断する事故にあい、加えてすぐに返済せねばならぬ借金があったが、あちこちから借金してこれ以上借りようがなくなり、「登天難、求人更難」と感じ、一時の出来心で家族に顔向けできない事をしてしまった、この上は法の裁きを受けたい、と述べたということである。

葉啓田は犯人逮捕の知らせを受けると、午後刑事警察局に向かった。林は葉啓田を見ると手錠を掛けられた手を挙げて葉啓田に謝罪の意を示し、生活苦のせいだったと説明し、葉啓田は、人をやって台中の家族の世話をさせることを申し出、また深く反省するように言った。

ところで、この事件でも問題になった、5,000万元恐喝事件であるが、葉啓田は同日、そうした事実がないことを強調し、また自分はそんな金持ちではないと述べた。

この5,000万元の一件は、前出の彼の伝記では概ね次のように整理されている。⁽⁶⁾

(5) 林央敏『寶島歌王葉啓田人生實録』第九章「峰廻路轉，歌王進入国会」前衛，2002では、最初の電話は5月24日で、台中の劉というヤクザの子分と称する男と名乗ったとある。

(6) (5) 書 182頁~183頁

この年5月初め芸能情報の雑誌社が、竹聯幫の一家の者と名乗る男が、葉啓田に手紙を回すよう要求してきて、それには5,000万元の要求が書かれていると伝えてきた。葉啓田は警政署秘書室に報告、警察に、雑誌社に対してその脅迫状を見せるよう求めた。しかし雑誌社は無くしたというばかりであって、結局10日近く何の進展も無いので、メディアを通して、仏の道を学び悪いことはやめるよう（「能多念佛，多聽佛法，不要再走錯路」）呼びかけた。

これが概要である。

また、葉啓田の当時の談話では、彼の名義で友人が商売をしており、外部の人は彼が多くの関連企業を持っているかのように誤解しているとした⁽⁷⁾。

葉啓田がここで語っているチェーン店とは食堂のことである。葉啓田はこの脅迫事件のあった民国80年（1991）、鄭進一作詞作曲（詞は陳維祥と合作）の『故郷』を吉馬唱片から出し、大ヒットした。それを受けて台湾全土に、店内に葉啓田のプロマイドを掲げた「故郷滷肉店」という台湾小吃の店が開かれた。店の作りからして、犯人が葉啓田の店と思ったのは無理からぬところではあるが、実は葉啓田の弁明の通り、このチェーンの経営者に名前を貸しただけであった。

3.3 寶島歌王葉啓田

葉啓田（本名葉憲修）は民国37年（1948）、葉蓮盤と葉黃爰の次男として阿里山に近い旧太保郷（現嘉義県太保市）水牛厝に生まれた。48年地元南新国小を卒業後嘉

(7) 6月1日付『聯合報』に掲載された劉福奎記者のインタビューは次の通り。

記者：5,000万元を恐喝されたのですか？

葉：ある雑誌社が、私宛の5,000万元要求の脅迫状を入手したと言ってきたことがあります。それを知って、私はその雑誌社に、脅迫状を見せてくれるように言ったのですが、向こうは、もう捨ててしまったと言うのです。

記者：これまで恐喝されたことは？

葉：ありません。ただ私が5,000万元恐喝されたという噂が立ってから、会社に幾つか無言電話がかかってきました。世間の人は私が大金持ちと思っているようですが、薬品会社も魯肉飯の方も友人の所有で、私は名前を貸している（「出個名」）だけです。

記者：立法委員選挙に出馬するという噂ですが、この点については？

葉：非常に意欲は有りますが、まだ決めていません。できれば、嘉義か台北県選挙区に立ちたいのですが。

南初中補校に進学したが、学業にはそれほど熱心ではなかった。

当時地元で開かれた歌謡ショー出演者に憧れ、13歳で台北に出るが、ほどなく帰郷、その後はセールス一座で歌ったりしていたが、やがて台北で歌手郭大誠のレッスンを受け、その斡旋で「内山姑娘」のレコードを出し、芸名を葉啓田とした。17歳の時である。これが大ヒット、同名の映画まで撮影されたほどである。⁽⁸⁾

小説では、葉啓田には、「紅歌星（人気歌手）」という冠が着いているが、恐喝事件の報道は、全て「寶島歌王」を冠している。これは、彼が20歳のとき放送局が十大台湾語歌手の投票を企画、男性の首位葉啓田に、この称号が贈られたのである。

民国57年（1968）、徴兵、60年（1971）除隊。この兵役前が歌手としての彼の前半のピークであった。なぜなら文化政策の所為で、次第に歌謡曲が国語主流に変わっていき、国語が苦手な葉啓田は、轉身できなかつたからである。葉啓田はその活躍の場を放送から歌謡ショーに移した。

しかし、やがて更に大きな躓きが起こる。日本での所謂「演歌歌手」が時に黒い交際を書き立てられるように、台湾の歌手たちも、例えば興行の所場代などと称して金銭を要求する「黒道」との関係が避けられなかつた。民国66年（1977）6月、台南の元寶樂園のショーに出演していた葉啓田は、親友蘇朝雄に金をせびりに来る闕明松らに対応するため知り合いの応援を頼んでいた。葉啓田のショーに居座る闕明松らと揉め事が起こり、ついに発砲事件となり、闕明松が射殺された。（「元寶命案」）事件後しばらく身を隠していた葉啓田は、やがて自首したが、「過失殺人」ではなく「糾衆殺人」として台南地方法院で審理が始まり、67年（1978）1月殺人教唆の罪で7年の実刑の判決が出た。葉啓田側の上告で、同年4月台南高分院は原判決を破棄し無罪とした。このため台南の連運生検察官が高等法院に上告した。68年（1979）、台湾高等法院は高分院の判決を破棄し、一審判決を支持、7年の刑となった。葉啓田は最高

(8) 更に、ご都合主義も良いところだが、柳の下の泥鰌は二匹どころではなかつたようで、「内山姑娘」が当たったというので「内山兄哥」が出された。前掲『寶島歌王葉啓田人生実録』巻末の「葉啓田唱片一覧表」を見ると、このシリーズでは以後「内山姑娘要出嫁」「内山兄哥病相思」「内山姑娘真無情」（以上54年）「内山兄哥巡茶山」「内山之戀」（55年）「内山和尚」（63年）「内山的姑娘」（75年）「内山姑娘嫁了後」（79年）が発売されている。

法院に上告，最高法院は高等法院に審理を差し戻し，結局 69 年（1980）高等法院は再び懲役 7 年の判決を下し，葉啓田が更に最高法院に上告，5 月に最高法院は上告を棄却，刑が確定した。

ところが葉啓田は，ここで再び逃亡し，指名手配されるに至る。日本人にはなかなか理解し難いが，その後葉啓田はショーで歌って食いつなぎ約 1 年逃亡生活を続けた。結局民国 71（1982）年 1 月，台北縣永和でショーを開いているところを逮捕され，審理後台北監獄（桃園市龜山）に収容された。

74 年（1985）仮釈放後歌壇に復帰，「愛拚才会贏」がヒットし，第二のピークを迎える。

葉啓田は，出所後は明らかに意図的に所謂ボランティアに参加していた。74 年三角湧の海山煤鑛一号坑の落盤事故では三峡鎮所に本名で義捐金を贈り，同年 10 月には高雄の山間部の孤兒院に葉啓田の名で寄付をした。また翌 75 年の台風で故郷一帯が被害を受けると，嘉義縣政府に見舞金を贈った。次の年には彰化縣の障害者施設に寄付をした。また 78 年には高雄山間部の孤兒院に慰問に出かけている。

そして天安門事件の際は国民党の大陸民主化運動支援活動に加わる形で寄付を呼びかけた。また『大頭春』でも出てくる中国華南の大洪水では，中国電視のチャリティーに寄付している。⁽⁹⁾

こうした行為は，確かに美談ではあるが，一方で売名と感ずる人も少なくなかった。この雰囲気の中で行われた，自分を恐喝した犯人に態々会いに出かけてマスコミの前で反省を促すという行動は，確かに大頭春ではなくとも，選挙目当てと見られても仕方が無かった。⁽¹⁰⁾

さて大頭春に疑念を抱かせた葉啓田の選挙であるが，葉啓田は果たして 11 月公示され 12 月 19 日投票となる第 2 回立法委員選挙に，生地嘉義の選挙区ではなく台北縣選挙区から無所属で立候補，後援会や歌手仲間の応援を得て当選した。しかし 95 年の改選では落選した。一度返り咲くものの，直近の選挙では再び落選している。また

(9) 「大陸華東華中地區發生嚴重水患，造成兩千多人喪生，受害耕地達一千六百萬公頃，災區並出現瘧疾・痢疾，傷寒等伝染症。」（『少年大頭春的生活週記』「恐怖的口香糖」15 頁）

(10) 「這就是作秀，我看葉啓田大概想出來競選總統吧」（『少年大頭春的生活週記』160 頁）

2001年には胃の腫瘍、もしくは胃潰瘍のため緊急入院で手術を受けた。この間選挙資金で多額の借金を抱えているとも言われ、報道では、資金を集めるためレコードの新盤を出したり、大陸でのツアーを計画しているという。

(接)

付記 最近、2003年11月初め東京で久しぶりに作者の張大春氏と会談した。当初筆者は、台湾出張に合わせて台北で会う計画をしていたが、張氏が夫人の仕事の都合で入れ違いに来日する形となったため、筆者も帰国を成田経由に変更して、張氏帰国前日に滞在している虎ノ門ホテルの居室で会うことができた。現在の台湾の状況も含め4時間をこえる楽しい話になったが、相変わらずエネルギッシュな印象である。この小説の続編は、もう一作書いてシリーズを完結させるつもりであると語り、主人公が30代半ばの話になるだろうと、20年後の登場人物のあれこれの構想も語ってくれて興味深かった。この小説の主人公の高校時代を描く『野孩子』は日本でも間もなく出版される予定で、日本の読者にどのように受け入れられるか楽しみである。